

していいこと、して悪いこと

山口県下関市立彦島中学校 1年 丸山 圭司



現代社会の生活において、必要不可欠になるほど、日常に浸透し続ける「インターネット」

様々な使い道があり、僕も、毎日のように利用しています。

しかし、便利さという利点がある一方で、使い方によっては人の心を傷つけ、犯罪にまで発展してしまう悲惨なケースも少なくはありません。

そんな社会で今、大きく問題視されているのがSNS上での「誹謗中傷」

最近では、度重なる無責任で心無い言葉を浴びせられたゆえに自ら命を投げ出してしまった芸能人のニュースを目にしました。

想像してみてください。

顔や名前などの身元が分からない赤の他人が放った悪質な一言で伝言ゲームのように人を介し、周囲に伝染してしまい誹謗されてしまう。

誰だって不快な気持ちになるのは明らかなことだと思います。

しかし、亡くなってしまった人がいる今もなお、誹謗中傷を続ける多くの人がいるという現状があります。

どうして、誹謗中傷が絶えないのか僕は大きな疑問を抱きました。

そこで調べてみると、この疑問に繋がる要因が大きく分けて2つあることがわかりました。

その一因として挙げられるのが匿名性の保障です。

匿名性とは発言した本人の身元がわからないようするシステムを意味し、SNSを含めるほとんどのコミュニティアプリは匿名で書き込みするのが一般的です。

しかし、本来個人情報を流出するのを防ぐためにあるこの仕組みに対して身元が明かされないことをいいことに何を書いてもいいと誤った考え方をする人がいるのです。

この一因について知り、何事も本来のきちんとした意味を熟知した上でその制度を守る姿勢の大切さに気付かされました。

もうひとつの要因として挙げられるのはSNS上で起こりやすい「集団心理」の発生です。

「他の誰かが誹謗中傷しているから、自分がやっても許されるだろう」という集団心理が責任逃れの安心感を生み出し、不特定多数の人達が相手に向かって無慈悲な言葉をかけ続けるケースも多々あります。

誹謗中傷がなぜなくなるのかという疑問を通して調べ、総括した結果、

2つの要因には共通するものがわかりました。

それは自分自身の無責任さを自覚していないことです。

誹謗中傷をする大抵の人は、自分が逆に誹謗されると不快になるということを考えもせず、軽い気持ちでSNS上に酷い言葉を並べています。

確かに、ここ数年でインターネット、コミュニティアプリを利用する人が急増し、それと同時にSNSは簡単に情報発信や発言ができるようになりました。

しかし、安易にSNS上で発言ができるがゆえに利用者の無責任さが出てしまい誹謗中傷に繋がる落とし穴にもなったのです。

ただ、こういった時代の流れはSNSを良い方向にも悪い方向にも進めました。

プラスな面としては情報を速く正確にSNS上で知ることができる便利さが大きな点だと感じました。

一方では直接向き合っただけコミュニケーションを取る頻度が減ったこと、やはり誹謗中傷がおさまらないことが該当します。

実例として今、世界中で猛威をふるう新型コロナウイルスに関連する2つの側面があります。

良い面としては、接触確認アプリの開発、コミュニティアプリの実用性が増加しました。

つまり、インターネットは使いようなのです。

悪い面としては新型コロナウイルスに命がけで対応している医師や看護師、感染してしまった患者に対して誹謗中傷する人がいることです。

誹謗する理由は人それぞれですが誹謗する側は自分にとっての正しさや常識を強調せず、一番に相手の気持ち、人権を尊重することが大切だと思います。

そしてこの2つの面から分かる通り、インターネットは人の使いようで大きく変わっていきます。

SNSを工夫して利用すれば、誹謗中傷をする人が減少する可能性もゼロパーセントではありません。

例えば、SNSを活用し、誹謗中傷で心に傷を負い、無念にも亡くなってしまった人がいることや、誹謗中傷がもたらす現状について、一人でも多くの人に知ってもらうことが大切だと思います。

人はまず何かを知ることから始まります。

そしてその中でSNSをどう活用し、どのような気持ちで受け取るのか。

誹謗中傷は一人ひとりが対策をすれば止められるはずなのです。